



▲今回で4回目の開催。カナダからリモート参加いただいたマセソン美季さんはじめ、多彩な出演者による事例発表や意見交換を行った。

特集記事
-Special Program-

障がい者スポーツ特別研修会2021

地域（市町村）にインクルーシブなスポーツ活動拠点を作ろう?!

開催概要&趣旨について

期日：令和3年2月21日（日）
会場：ふれあいランド岩手（盛岡市）

本研修会は2018年の初開催以来、4度目の開催となる。いずれも、一般社団法人コ・イノベーション研究所との共同企画により実施している。同研究所代表理事の橋本大佑さんには今回もファシリテーターを務めていただいた。

さて、地域においてスポーツ活動拠点を整備する上では、スポーツをより広義的に捉えることがヒントとなる。単なる種目ではなく、余暇・レクリエーションに含まれる身体活動やアウトドアでの活動やレジャー、教育など幅広く捉えることにより、様々な方々が関わることができる。

今回は、『地域』『インクルーシブスポーツ』『活動拠点作り』をテーマに国際パラリンピック委員会教育委員など国内外において多くの活動実績を残されているマセソン美季さんをはじめ、多彩なゲストをお招きして研修会を開催した。ここでは、特集記事として、当日の講演等の内容を紹介いたします。ただし、紙面の都合上、内容を要約しています。

なお、コロナ禍への対応として当日の参加形態は来場参加及びZoom参加の「ハイブリット方式」を採用した。



ファシリテーター：橋本 大佑 氏
一般社団法人コ・イノベーション研究所代表理事。筑波大学で障害児教育を学んだ後、渡独して障害者スポーツを学ぶ。2009年に帰国し、スポーツを活用した障害者の孤立防止に取組む。2016年より現職。国内外で障害者スポーツに関わる講演を行う。また、共生社会の実現に向けて企業を対象としたセミナーやコンサルタントも行う。

CONTENTS



- 特集記事
P1~4/障がい者スポーツ特別研修 2021
- 活動報告
P5/第1回大船渡さんまカップ/岩手県ユニバーサル麻雀交流大会
P6/フライングディスク大会/車いすカーリング体験会
P7/PT のための中級障がい者スポーツ指導員養成講習会/日本ボッチャ協会公認サポーター養成講習会/卓球バレー指導者養成講習会
P8/岡崎 Owls バレーボール教室/卓球バレー教室/第1回岩手県パラアーチェリー記録
P9/パラスノースポーツ体験教室/県障がい者ふれあい卓球教室
P10/障がい者スキー交流会 2021/ゲートボール紫波交流大会
P11/中級障がい者スポーツ指導員養成講習会/新規会員紹介
- 会員紹介 (P12)

ホームページについて

開催要項、申込書データのダウンロードや詳細情報は当協会のホームページよりご覧ください。

URL → <https://www.iwate-adaptive.or.jp/>



お問合せ先：一般社団法人岩手県障がい者スポーツ協会
岩手県障がい者スポーツ指導者協議会
岩手県卓球バレー協会
TEL 019-637-5055 / FAX 019-637-7626
E-mail : info@iwate-adaptive.or.jp

基調講演1:「スポーツ指導員の視野を広げるセラピューテックレクリエーションとは？」



講師：永田 真一さん

テンブル大学公衆衛生学部社会行動科学科博士研究員。筑波大学卒業後、2008年より東京都障害者スポーツ協会に勤務。2012年に渡米し、インディアナ大学大学院等にて、レクリエーション療法や発達障がい者のスポーツ、障がい者スキーインストラクターなど広い分野に渡り活躍。日本では数少ないCTRSの資格取得者である。車いすバスケットボールや車いすラグビー等、日本代表チームの海外遠征では通訳を務めている。

*障がい者スポーツとの出会い

高校生の時、野球部のマネージャーとして裏方の仕事を経験したこと、そして1冊のパラリンピックの本に出会い衝撃を受け、茨城の社会福祉協議会から情報を得て電動車いすサッカーのボランティアに参加した。大学は、特殊教育が学べる筑波大学へ進学。学生時代は先生方からのアドバイスでボランティアサークルを立ち上げ活動に没頭した。その時に障がいのあるなしに関わらずスポーツ活動をしているカナダにある障がい者スポーツセンター「パレエティビレッジ」を知り、学生インターンとして半年間参加。卒業後は、東京都障害者スポーツ協会に勤務する。2012年に奨学金で大学にて博士号を取得する誘いを受け、アメリカへ渡ることを即決した。

*セラピューテック・レクリエーションの活用

9年間のアメリカ生活で学んだセラピューテックレクリエーションについてお伝えしたい。アメリカでは多くの人がレクリエーションセラピー(以下、RT)と呼んでいる。

健康的な生活の質を最大化するために意図的にレクリエーションを使用する。レクリエーションはただのツールではない。日常的にやりたいことの自発的な気づきを促し、それを実現できる仕組みにつなげる。その意味ではレクリエーションが目的にもなる。また職業資格としても注目され、アメリカ以外の国でも活用が始まっている。

*障がい者スポーツとRTの関連

RTは障がい者スポーツ振興や生涯スポーツの理念と共通する部分が多いが、一般的なスポーツにおける競技力向上やスポーツ医学分野とは明らかに異なる。

ここに日本とアイルランドにおける知的障がいのある方の余暇活動ランキングのデータがある。両国とも上位にスポーツ種目はなく、10番目以降ようやく出てくる。よって、スポーツ指導者として関わる場合、福祉関係者でないかぎり、スポーツ種目だけを活動の対象としてしまうと支援できる方は限定的になってしまう。それを解消する1つの方法として活動範囲を余暇やレクリエーション活動に広げることが有効である。また、魚釣り、山菜・きのこ取り、キャンプなどの活動には身体的活動が含まれることにも着目したい。

*活動範囲を広げよう

アメリカではRTは理学療法士、作業療法士、言語聴覚士と並ぶセラピストとして位置づけられていることが多い。参考情報だが、全米障害者スポーツセンター(NSCD)のプログラムディレクターもRT資格を取得している。

障害のある方の中にはスポーツに対して苦手意識のある方や体験にたいして不安を抱えている方が多いのが現状である。また、地域に住む障害のある方々の興味・関心は多様化している。大切なのは、本人がやりたいことを一緒に探すことから始めることである。

多くの余暇・レクリエーション活動には、実は身体活動が含まれている。障がい者スポーツ指導員の専門性はこのような身体活動に広く応用できる(強みとなる)。本人のニーズに合わせて支援することにより、指導者としての役割や重要性が一層高まると思う。

基調講演2:「パラリンピック教育のあり方～障害の社会モデルと共生社会の実現」



講師：マセソン美季さん

1998 長野パラリンピック冬季競技大会、アイスレジャススピードレースに出場、1500mでは世界記録更新。金3、銀1を獲得したパラリンピアン。カナダ在住、二児の母。選手生活引退後は、スポーツと教育の力を活用しながら、共生社会の構築を目指した活動に従事。国連世界障害者デーの式典でオープニングのスピーチを行ったり、国連人権理事事に登壇したりするなど、国際的な舞台でも活躍。主な役職は日本財団パラリンピックサポートセンタープロジェクトマネージャー、国際パラリンピック委員会教育委員会委員、日本パラリンピック委員会運営委員

*将来の夢は体育の先生でした

小さい頃から体を動かすことが大好きで将来の夢は体育の先生でした。近所の子供たちに宿題を教えた時の「わかった」「できた」という表情が大好きでした。高校時には体育教員を目指すことが明確になり、大学に進学しました。入学した秋頃、青信号横断中に居眠り運転のトラックに跳ねられ、頸椎、胸椎、腰椎の3か所を骨折。以来、車いすユーザーとなりました。

当時、全国各地から脊髄損傷者や頸椎損傷者が集まってくる大きな病院に入院して同世代の患者も多くいました。周りからは、通学はできないが卒業証書は出しますとか、学校では受け入れが難しく養護学校へ転入するといった話が聞こえてきました。そんなとき私は幸いにも大学から復学という選択肢を提示されました。私の希望は変わらず教員養成課程でした。先生からは、車いすだからと言って、実技の講義を見学してレポート提出に代えることはできないが、他の学生と一緒に授業を受けて単位を取得すれば、教員免許はとれると言われました。

*車いすでの学生生活

パラリンピックという言葉自体が浸透していない時代に一人だけ車いすですべての授業を受けることは、先生にも周りの学生にも私とっても試行錯誤の連続でした。例えば、一緒にソフトボールをするために、車いすで打ちやすいようにティーにボールをのせて打ってはどうかとか、打ったら代走をだしていいとか、みんなでルールを考えながらの授業でした。しかし、これが私にとって貴重な経験となりました。

当時は、私が一緒にいることで迷惑をかけているのではないかとという想いもありましたが、卒業後、教員になった友人から「あの時の経験が今すぐ役に立ってるよ」と言われて一緒にできたことが本当によかったと感じました。

*スポーツとの出会い～マインドセット

まだ病院にいた時に、パラリンピックに詳しい私の主治医からスポーツに誘われました。初めて外出許可が出た時に半ば強引にスポーツセンターに連れていかれ、先生と一緒にプールに入りました。

足が動かなくなった体を他人に見せることに抵抗感がありましたが、スポーツ現場に戻ると少しでも上手に少しでも速く泳げるようにと、マインドがシフトして、障害によりできなかったことだけではなく、いろいろなことができることに気づき、私の中で生活の質が向上したことを覚えています。

*広がる世界と現実～アメリカ留学へ

スポーツとの出会いにより、自分の視野や世界が広がりました。大学4年の時、大分の車いすマラソンに出場しました。卒業を控えていたので、選手から職業を聞いて回りました。当時、私の周りでは「労災で暮らしている」「障害基礎年金で生計を立てている」「障害者枠でパートの仕事」等、日本では車いすでもスポーツはたくさんできるけど、社会の中では居場所がないように思いました。でも海外の選手たちに聞くと航空管制官、弁護士、体育教員の他、いろいろな職業に就いているのです。

このような話を聞いてとてもワクワクしました。それから私は自分の可能性を見つけるためには留学しかないと考え、渡米することを決めました。

*イリノイ州立大学での生活

私が選んだのはシカゴ近くのイリノイ州立大学です。この大学は規模が大きく、学生4万人中、1500名以上が障害のある学生がいると言われています。そして、キャンパス中のあらゆるアクセシビリティが整っています。道路も段差がなく、キャンパス内のバスには普通にスロープがあり、誰の手を借りなくても自由に移動や勉強ができます。

当時は陸上をやっていました。部員には同世代の車いすユーザーも多く、一番大きかったのは、親や医者が教えてくれなかったことを情報共有できたことや車いすの有無が意思決定に全く影響しない社会を目の当たりにしたことです。

*アクセシビリティの父～ティム・ニュージェント

画像に写っているのは(会場のスクリーン)、ティモシー・ニュージェントという方でアクセシビリティの父と言われています。傷痍軍人の高等教育の権利を勝ち取り、そのモデル校がイリノイ州立大学でした。学生と一緒に車いすスロープの傾斜角度を割り出す等のアクセス問題の取り組みや1990年のアメリカ障害者法のモデルにもなった人です。

ティムさんの家にはよくお邪魔していました。一番覚えていたのは、問題があるということは、アイデアが欠如しているだけのことというお話です。今解決できていない問題に対し、誰かがアイデアを出して解決策を見つけた時点で、それは問題じゃなくなる。私の障害に対する考えが変わったのはティムさんとの出会いでした。

*差別や偏見は『〇〇』がもたらす

車いすで生活するようになってから初めて差別とか偏見を意識するようになりました。なぜ、その人の障害やできないことに注目するのか。私は事故に会う前も後も変わらず私なのに周りの目や態度が変化するのはなぜだろう。

ある時、差別や偏見は「教育」がもたらすと言われました。教育畑の人間としてはショックでしたが、逆に教育を上手く使うことができれば、差別や偏見は減らすことができるのでは？と考えました。

このことがパラリンピック教育に関わるきっかけとなり、12月3日の国際障害者デーでは、国連事務総長の前でオープニングスピーチを担当しました。大学や障害当事者として国内外で経験してきたことを活かしたい。日本でのパラリンピック開催を契機に障害に対する理解を深める機会として最大限に活かしたい。これらが、パラリンピック教育プログラムの開発、普及啓発活動につながっていきます。

*パラリンピックが目指す共生社会

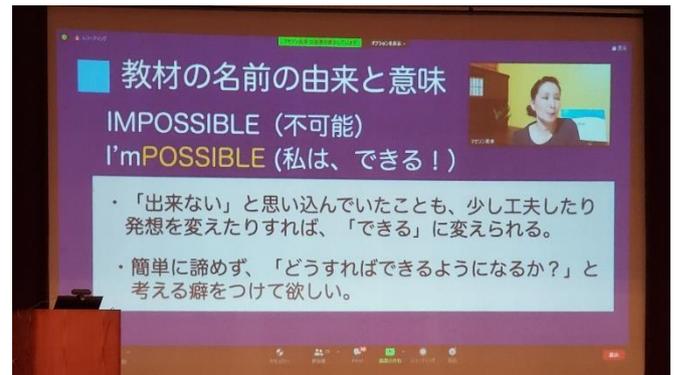
1998年、私が長野パラリンピックに出場した当時は、日本でのパラリンピックの認知度は低いものでした。最近は障害のあるトップアスリートの大会として認知されています。同時にパラスポーツを通してインクルーシブな社会を創ることを目指す大会であるということも知られるようになってきました。

このインクルーシブという言葉は馴染みがないかもしれませんが。反対語はエクスクルーシブ＝「排除する、除け者にする」という意味なので、その反対の「包括する、誰も取り残さない」と考えるとわかりやすいです。日本では、「共生社会」という言葉で表現されることが多いようです。

*インポッシブルからアムポッシブルへ

国際パラリンピック委員会(以下、IPC)はパラリンピックを通して共生社会を創ることを目指しています。それを具現化する1つの手段として「I'm POSSIBLE」というIPC公認教材を活用したパラリンピック教育があります。アムポッシブルは造語です。不可能を意味する「IMPOSSIBLE」のIとMの間にアポストロフィーをつけることにより、「私はできる」を意味する「I'm POSSIBLE」となります。つまり、「できない」と思

い込んでいたことも、少し工夫したり発想を変えたりすれば「できる」に変わる。簡単に諦めず「どうしたらできるようになるか?」と考える態度を身につけて欲しいという想いが込められています。



*パラリンピック教育の現状

パラリンピック教育を目的とした授業の内容は、パラリンピアンへの講演とパラスポーツ体験を組合せたイベント型の授業やパラスポーツの体験に重点を置き、外部講師による出前授業が多く行われているようです。

このイベント型、出前型にも良いところがあります。子供たちにとってパラスポーツ体験は新鮮な体験です。また、「パラリンピックの応援に行きたい」「障害のある人を身近に感じるこ

とができた」との声が聞かれます。一方で、しっかりとしたファシリテーションができていないと「障害のある人は大変だと思う」「障害のある人はかわいそうだ」など、せつかくの障害の疑似体験も障害の理解や心のバリアフリーにつながらず、ネガティブなものとなり、余計に差別と偏見を助長してしまう可能性があります。

また、教育現場ではパラリンピック教育の意義や目的がきちんと理解されていない現状もあります。どの教科でやるか? 誰がやるか? 対象学年は? などの声が聞かれます。

*『I'm POSSIBLE』の日本語版について

そこで私たちが開発したのが「I'm POSSIBLE(アムポッシブル)」の日本語版の教材です。この教材は授業の際に必要なものがすべて含まれており、小学生版と中高生版の2種類があります。小学生版は45分を1ユニットとして、中高生版は50分を1ユニットとして、それぞれ15ユニットずつ、内訳は10回分の座学と5回分のスポーツ体験が含まれています。選手紹介のため、最大で6分ぐらい映像や黒板掲示用の資料や画像データとかすべてセットになっています。

*3つのステップで構成

また、パラリンピック教育の中で私たちは3つのステップを紹介しています。まずは「知る」、次に「考える」、最後に「行動する」です。私たちが目指しているのは、自分たちが暮らす社会を、自分たちの力でより良い場所に変えていく。共生社会の創造に向けて自ら行動を起こせる子供たち、若者を増やしていくということです。

*共生社会を創る鍵となるのは

さて、この共生社会を創っていく鍵は、いったい誰だろうと考えた時に一番ダイレクトに行けるのは先生方ではないか。というふうに考えました。

学校教員にフォーカスすることで先生方たちから子どもたち、保護者、地域の皆さんたちに向けて発信していただければ一番手取り早いというか、一番着実な方法ではないかということで、私たちは教員に着目して活動をしています。

私たちが抱えている課題は、パラリンピック教育が、共生社会を創るための考え方や障害の社会モデルを理解させるために学ぶ学習であることを浸透させることです。是非、多くの教育現場でこの教材を活用していただきたいと思います。

話題提供:「わが国の障がい者スポーツの現状と課題」



話題提供者: 小淵 和也さん

(公財) 笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所 政策ディレクター。2002年中央大学法学部卒業。単身渡米し、IT企業勤務。日本障がい者スポーツ協会公認中級障がい者スポーツ指導員。知的障害者の移動支援従業者(ガイドヘルパー)として、障害者の余暇支援にも携わる。2011年10月より現職。主な研究研究は、2014年「障害者スポーツ施設に関する研究」、2015年スポーツ庁「地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)」等多数。

*日本の障がい者スポーツの3つの転換点

1つ目は1964年の東京パラリンピック。東京パラに参加した日本選手団のほとんどが施設入所者と病院の患者であった。海外の選手はほとんど就労者で日本は53人中5人という状況。また、そのせいか外国人選手は社会的に自立して堂々とした振る舞いに衝撃を受けた。レガシーとして日本身体障害者スポーツ協会が設立。全国身体障害者スポーツ大会の開催。

次は1998年の長野パラリンピックです。1991年に長野パラ開催が決定後、競技力向上の取組みとしてジャパンパラがスタート。障がい者スポーツとかパラリンピックという言葉が認知され始める。長野パラのレガシーとして1999年の三障害を対象として日本障害者スポーツ協会の名称変更と日本パラリンピック委員会の設立。また、2001年には身体・知的の全国大会が統合され、第1回全国障害者スポーツ大会が開催される。

そして2021年の東京パラリンピックと続く。1964年の東京パラで障がい者スポーツの種が蒔かれ、1998年の長野パラでは、リハビリの延長からスポーツへと、報道も社会面ではなく、スポーツ面で取り扱う機会が増えた。そして、2021年はどのような変化が起こるのだろうか？

*パラリンピック開催における様々な変化

パラリンピックを目前にメディアの注目度が上がっている。自治体の予算も増えている。一方でスポーツ実施率には変化がない。東京パラリンピックが近づいている今だからこそ、障害児・者がいつでも・どこでもスポーツに接することができる連携体制を構築していくことが重要である。障害者スポーツ指導者の多様性についても考えることが重要。専門性、指導力の高いスーパーマンだけではなく、関心の高いボランティア等、様々な立場で関わりやすい環境を作っていくことも重要。

話題提供:「県外から見た岩手県の取組みにおける現状と課題」～橋本大佑さん

*人口少数の都道府県が抱える共通課題

県土面積は全国2位。人口は122万人。森林が多く可住面積は23%。33の市町村があり、人口20万人を超えるのは盛岡市のみ、10万人以上が2つ。残りの30は10万人以下ということで比較的規模の小さな市町村が点在しているのが岩手県の地理的な特徴である。平成28年度の手帳所持者数は74,813人。日本の障害者の比率である7.4%に当てはめると約93,000人となる。身体障害手帳発行者の8割程度は60歳以上である。

また、スポーツ参加のために数時間、車での移動が必要となる場合もあり、移動負担が参加制約となる。よって、今回のシンポジウムのテーマである市町村ごとにスポーツ機会が提供される必要があると言える。ここでの課題は各地域に分散した場合、年齢や障害の種類の違う多様な方が一緒に参加するという状況が生じてくる。これは岩手のみならず面積の大きな県や人口の少ない地域も同様に生じてくる課題になる。

もう1つは2016年、障害者の差別解消法が施行。これにより、公共の体育施設は障害者の利用への対応義務が生じた。しかし、実際はバリアフリー化が遅れている。また、障害により利用を断られるケースがあるので地域の中で活動の拠点を探すのは難しい。また、必要なスポーツ用具の確保も同様。

*最大の特徴は希望郷いわて大会とそのレガシー

岩手の現状を語る上では2016年の全国障害者スポーツ大会は欠かせない。特に卓球バレーを推進した取組みを紹介する。正式競技に参加した全選手団300名に対して卓球バレー1種目で200名が参加。というように、大会を機に普及に成功した事例であると言える。

なぜ、卓球バレーが有効に活用できたかを簡単に説明する。卓球バレーは筋ジストロフィーという非常に重度の障害の方を対象に作った競技であり、最重度の方が競技できる。ということは他の身体障害の方も参加しやすい。障害のある人やない人も、視覚障害、聴覚障害、知的障害など一緒に混ぜてプレーができるという、先ほど説明した多様性のある地域の現場に即した競技であったこと。そして、リスクマネジメントが非常に容易であったことが普及や指導者養成に好影響を与えた。

*今後の活動展開に向けた提言

卓球バレーは沿岸地域、久慈、宮古、大船渡で大会が開催されるようになったが、この流れを是非、他の地域にも広げたい。もう1つは今、自治体、県、障がい者スポーツ協会の支援で行われている卓球バレーの教室やイベントを自分たちの自治体の中での運営に切り替えていく必要がある。そのためには、今、新しくできた場に参加している障害当事者自らが組織を運営できるようにサポートしていく取組みが重要になってくる。

最後に卓球バレーについて。卓球バレーは最初の1歩として素晴らしいスポーツである。そこで、スポーツの楽しみやみんなと交わる喜びを知ってもらった人にその先のスポーツ機会を提供していくというのが、今後の岩手の大きな課題になっていくと思う。

シンポジウム:「地域にインクルーシブなスポーツ活動拠点を作ろう!」～出演者コメント紹介

紙面の都合上、出演者コメントをピックアップしてお伝えします!

マセソン(継続的なスポーツ参加を促すために)ノカナダの脊髄損傷者を支援している。1度参加したら次の予約をする。その時に周りの仲間たちも一緒に参加してもらおう。心理作戦という感じです。最初は約束をした義務感かもしれないが、顔を合わせるうちに利用者間で情報共有したり、相談相手になったり、良い関係が生まれ始める。

永田(リハスタッフの余暇活動への関心度の低さに対して)ノ余暇・レクリエーションという言葉が日本では理解されていないことが要因。また、余暇の活用には、その方の人生経験にも関連するので難しい部分もある。まずは対象者からヒアリングを行い、やりたいことを聞き出すのも1つのヒントである。

(個人情報保護の壁、対象者へのアプローチについて)橋本ノドイツのケルンの人口100万人ぐらいである。そこにはケルン車いすスポーツクラブがあり、車いすユーザーが200名登録をして週1回以上活動している。当時、クラブの方に聞いたが、ホームページからの入会は200名中5名で残りの195名の方はすべて、先に入会した車いす当事者からの勧誘である。また、ドイツは車いすラグビーの選手400名のうち50名が女子プレーヤーで、この数はドイツ以外の全世界の女子選手を合計した数よりも多い。なぜドイツでは女子選手が多いのかというと、身近に自分のモデルになる女性プレーヤーがいることが大きい。このように当事者の力は非常に重要である。

小淵ノ私は居場所感という表現を使っている。スポーツをできる楽しみに加えて自分がそこで役割を与えられたり、何か達成感を味わえたりするか。この居場所感を生み出すきっかけになる人を「重要他者」という言い方をした場合、リハビリ施設のスタッフ、当事者の友人、リアルな友人、ネット上の友人、その人により重要他者は違う。対象となる重要他者を把握しながらいろいろな角度で関わっていくことが必要ではないか。

※紙面スペースに限りがありますので、詳細はホームページ「活動報告」をご覧ください。

『第1回大船渡さんまカップ』を開催！

◆期日：令和2年12月6日（日）

◆会場：大船渡市民体育館

◆レポート：三陸での卓球バレー大会は、久慈市のあまちゃんカップ、宮古市のさんてつカップ、陸前高田市のサントリーたかたカップに続き、4地区目の開催となった。大船渡市では、これまでにスポーツ推進委員を中心に卓球バレーに取組み、老人クラブのスポーツ大会や体験教室の開催などを実施してきた。それだけに今回の開催は意義深く感じている。さて、会場は大船渡市民体育館の柔剣道場、卓球室、多目的室をつなげた形で使用した。縦長のサブアリーナという雰囲気である。会場予約については、大船渡市体育協会にご配慮いただいた。また、大船渡市老人クラブや大洋会のご協力により、参加チームはチャレンジクラスに6チーム、わんこクラスに7チームの合計14チームが参加した。当初は、参加チームが集まらず苦戦したが、皆さんの協力で感謝感謝である。

試合は、和気あいあいとした雰囲気が進んだが、やはり勝負がかかると白熱してくるものである。そして好プレー、珍プレーが連続する。

卓球バレーはプレーするのが一番楽しいが、こうなってくると見ている方も楽しくなってくるものである。しかし、白熱すると審判は本当に大変である。

チャレンジクラスは6チームによる総当たり戦を行った。結果は、全勝のアスレクトが優勝。さんさが第2位、3位には気仙沼Aチームが入った。果敢にチャレンジクラスにエントリーした福寿会男子・女子チームも大健闘であった。

わんこクラスは、大船渡スポ進とホールインワン（大船渡市グラウンドゴルフ協会）との頂上決戦を制した大船渡スポ進が優勝した。交流戦も行い、皆さんたっぷり試合を楽しんでいただいた。



▲①柔剣道場+卓球室+ミーティングルームを1つに統合して使用した。②奥側が大船渡市スポーツ推進委員協議会チーム、手前側はまるこ大盛チームの対戦。③気仙沼チームA対Bチームの同胞対決！

『第2回岩手県ユニバーサル麻雀交流大会』を開催！

◆期日：令和2年12月13日（日）／◆会場：ふれあいランド岩手

◆レポート：7月の第1回大会に引き続き2回目のeスポーツ事業である。実施にあたり、「なぜeスポーツなのか」「eスポーツはスポーツなのか」という質問をいただく。私たちも試行錯誤しながらの取り組みであるが、「Sports For All」を考えると、既存のスポーツに参加できない、例えば、種々の理由により外出困難な方々にスポーツを提供するにはどうしたらいいだろうか。この問題に1つの可能性を与えるのがeスポーツではないかと考える。今回の取り組みは可能性を探る事業ともいえる。

さて、試合方法は、前回同様、予選リーグ（東風戦）はランダム対戦を3回実施し、3試合の勝ち点合計により、上位8名が準決勝に進出。

準決勝は各組上位2名、合計4名が決勝進出（決勝のみ東南戦）。予選リーグで実力を発揮したのが、「全角岩手」さんと前回2位の「こすも1934」さんがワンツーで準決勝進出。残りの6名枠は大接戦となった。最終結果は、予選は下位通過だったが、準決勝・決勝で一気にギアを上げた「旗良（きよし）」さんが見事に優勝。5時間以上に及び白熱の大会を制した。

今後も当協会ではeスポーツ事業に取り組み、最終的にはALS患者の会など、通常のスポーツ参加が困難と考えられる皆さんにも参加していただけるよう、試行錯誤を重ね、オンラインのメリットを活かせる方法を考えていきたいと思う。



▲ 今回も静かなる熱戦が繰り広げられました！

1 第2回 岩手県ユニバーサル麻雀交流大会

主 催：一般社団法人岩手県障がい者スポーツ協会
共 催：岩手eスポーツ協会
技術協力：NTT東日本 / BHレンタルサービス盛岡

2 第2回 岩手県ユニバーサル麻雀交流大会

主 催：一般社団法人岩手県障がい者スポーツ協会
共 催：岩手eスポーツ協会
技術協力：NTT東日本 / BHレンタルサービス盛岡

3 大会の流れ

9:50～ 11:30～ 12:10～13:10
予選1回目 予選3回目 お昼休み
10:40～ 予選2回目
14:00～ 決勝戦 ※東南戦
13:10～ 準決勝

4 優勝 旗良さん

準優勝 3位 こすも1934さん
4位 南場のきくりんさん 全角岩手さん

▲①岩手eスポーツ協会代表の遠藤徹也氏。団体としてeスポーツと障がい者スポーツのコラボ事業に理解をいただいている。また、障がい者施設での訪問体験等にも積極的に取り組んでいる。②解説を務めた同協会の川村響氏（左）、川村氏は学生時代、「学生麻雀甲子園」でチーム戦全国3位という実績を持つ。そしておとなりは岩間祐介氏（右）、岩間氏は前回に引き続き解説を努めていただいた。お二人ともとってもわかりやすく解説していただきました。③大会の流れ。④上位4名の順位です。入賞者の皆さん、おめでとうございます！

『オンラインでつなぐフライングディスク大会』に参加！

◆期日：令和2年12月20日（日）／◆会場：ふれあいランド岩手（盛岡市）

◆レポート：青森・岩手・福島の各会場をオンラインでつなぎ、フライングディスク交流大会が開催されました。弘前大学教育学部附属特別支援学校の中嶋先生からお誘いがあり、初めて参加することになりました。種目はアキュラシーで3m、5m、7mの距離を全6組で競い合いました。室内ということもあり、ほぼ条件も一緒ですので、大会として十分に成立します。アナウンスに従い、1組ずつ各会場が順番に競技を実施。他会場の様子はモニターで見守ります。本県からは5名の選手が参加しました。本県は、コロナ禍においても7月から月1回のペースで練習会を実施しています。練習会に参加している選手の皆さんは、慣れない環境でも実力を発揮し、見事に上位入賞を果たしました。

今回初めて参加してみて、オンラインでもターゲット種目であれば競技として成立できると感じました。参加したのは、3つの県でしたが、今後は多くの地域の皆さんと競技を通して交流できる機会を作ることも可能だと思います。また、アーチェリー競技をはじめ、他のターゲット種目やポッチャなどいろいろな種目に活用できる可能性を感じます。コロナ禍においても工夫すれば様々な活動ができることを実感させていただきました。ご協力いただいた青森、岩手、福島のフライングディスク協会所属審判、スタッフの皆さん、選手、保護者、そして応援に駆けつけていただいた職員の皆さん、ありがとうございました。



▲①他県の様子はモニターを通して確認できます。オンライン会議のイメージですね。ちなみにアプリは、マイクロソフトのチームズを使用しました。②合間にはスタッフから指導を受ける場面もありました。③岩手県の競技順番が回ってきました！④恒例の万歳三唱もオンラインで。コロナ禍もあり、声は出さずに・・・

北京パラリンピック冬季大会を目指そう！ 車いすカーリング体験会

◆期日：令和2年12月20日（日）

◆会場：みちのくコカ・コーラボトリングリンク（盛岡市アイスリンク）

◆レポート：今年度より岩手県委託事業「デュアルアスリートプロジェクト事業」がスタート。これに伴い、車いすカーリングチームを結成しました。チーム名は、「Shine（シャイン）」。みんなで北京で輝けたら最高ですね。

さて、今回は総合型地域スポーツクラブ「NPO 法人いはとーぶスポーツクラブ」が主催するカーリング教室に参加してまいりました。ゲスト講師は岩手県カーリング協会の浪岡正行会長です。まずは、浪岡会長よりカーリングの魅力について講話をいただき、その後は氷上にて実技指導を受けました。気さくな浪岡会長の話術に皆さん、笑顔で体験していました。マスクをしているので表情が伝わりづらく残念です。

そして、実は浪岡会長は車いすカーリング日本代表チームの強化委員長でもあります。本県に車いすカーリングチームが誕生したことを大変喜んでおりました。また、県カーリング協会のバックアップも約束していただきました。そんなこともあり、今回は、岩手県カーリング選手権の優勝チームが実技指導をサポート。今後はカーリングを通して技術交流が行われるきっかけになりそうです。この輪を広げながら、北京パラリンピックに出場する選手も育成していきたいと思えます。



▲①最初に浪岡会長より、カーリングの魅力についての講話をいただきました！②、③メディアからの取材を受ける選手たち。③浪岡会長より実技指導をいただきました。⑤岩手県カーリング選手権優勝メンバーも加わり、みんなでパチリ！

『PTのための中級障がい者スポーツ指導員養成講習会』

◆期日：令和2年12月26日（土）～27日（日）
令和3年1月9日（土）～10日（日）

◆会場：ふれあいランド岩手（盛岡市）

◆レポート：日本障がい者スポーツ協会公認の中級指導者講習は、①初級指導者を対象、②日本スポーツ協会公認スポーツ指導者対象、③理学療法士対象の3つの区分で実施され、それぞれカリキュラムと時間数が異なる。今回は、日本障がい者スポーツ協会からの委託事業として理学療法士（以下、「PT」という）を対象とした中級講習会を実施した。

本講習会は、岩手県理学療法士会からの要望があり、受託し、今回で3度目の開催である。PTは、医療機関に従事している方がほとんどであり、新型コロナウイルスの発生状況が懸念されるところである。本県の感染者は7月末より始め、その後、大きな発生数はない状態が続いていた。しかし、11月より急激に増え、盛岡市内の医療機関では大規模なクラスターが発生した。その結果、今回の講習会も影響を受け、県内のPTの参加はゼロとなってしまった。このまま受講者が集まらなければ中止も考えたのだが、県外からの受講希望があり、予定通り実施した。受講者は、千葉県から2名、神奈川県から3名の計5名であった。

例年、受講者の障がい者スポーツへの貢献に対する意識の高さを感じている。今回も同様で、講師からの質問には積極的に参加していた。受講内容は、PTの皆さんが関心を持ち、その後の活動意欲につながるよう毎回講師の皆さんと内容調整をしている。特に車いすのスポーツ実習等はPTにとっても貴重な経験になったのではないと思う。受講者の皆さんが、それぞれの登録地区においてPTの専門知識を活かしながら障がい者スポーツ指導員として活躍することを期待したい。



▲①一部の講義はリモートで実施した。②実技「フライングディスク～様々なレクにもアレンジ！」③実技「車いすスポーツ～まずはシーティングをマスターしよう」

『日本ボッチャ協会公認サポーター養成講習会』を開催

◆期日：令和3年1月16日（土）～17日（日）

◆会場：東口体育館（一関市）

◆レポート：ボッチャ競技は、パラリンピックの正式競技であり、オリパラ教育の一環として採用されることが多い。また、令和3年度から全国障害者スポーツ大会（以下、「全スポ」という）の正式種目として採用されたことも合わせ、注目度は増している。各都道府県・指定都市では地区予選会の実施のためのボッチャ協会公認の審判養成が急務となる。

また、ボッチャは、インクルーシブスポーツとして誰もが参加しやすい魅力があり、地域におけるスポーツ振興を通じた共生社会づくり推進には大いに力を発揮することが期待される。

そこで、本県では毎年、日本ボッチャ協会公認のサポーター養成講習会を実施している。これは、ボッチャの指導法や活用法を理解して、それぞれの所属する団体、地域においてボッチャの活用を促進する狙いで行っている。今回は、2日間に渡り、講習会を開催した。講師は、今回も日本ボッチャ協会強化部長の村上光輝さんにいらしていただいた。村上さんは、ボッチャ日本代表チームのヘッドコーチを務めており、大変ご多忙な時期にも関わらずいらしていただいた。ボッチャ指導の導入からミニゲームまでの展開など地域での普及を念頭においた講習内容でとても参考になった。また、ボッチャ協会が推奨するコロナ感染防止対策方法などを情報提供いただき、今後の普及活動に向けて貴重な時間となった。



▲①日本ボッチャ協会強化部長の村上光輝さん（画像中央）、日本代表チームのヘッドコーチを務める。②講義の様子～導入方法から試合体験まで1つのプログラムとして確立されている

『卓球バレー指導者養成講習会』を開催！

◆期日：令和3年2月6日（土）

◆会場：前沢いきいきスポーツランド（奥州市）

◆レポート：本事業は「いきいき前沢スポーツクラブ（以下、「前沢SC」という）」の主催事業として開催した。前沢SCは総合型地域スポーツクラブとして長年に渡り、地域のスポーツ振興に積極的に取り組んでいる。今年度は岩手県からの委託事業として障がい者スポーツの普及活動にも取り組んでいる。本事業を活用して、着々と福祉関係者とのネットワークを築き、コロナ禍では珍しく福祉事業所への訪問教室も数多く実施した。

さて、今回は、ユニバーサルスポーツと注目を集める卓球バレーの指導者養成講習会を実施。前沢SCの職員や地区のスポーツ推進委員、障がい者団体関係者など12名が日本卓球バレー連盟公認指導者資格を取得した。



▲実技の様子。指導方法に加え審判方法も学ぶ。主審、副審、プレーヤーを交互に体験しながら実施

『岡崎建設 Owls バレーボール教室』

◆期日：令和3年2月7日（日）／◆会場：オガールアリーナ（紫波町）
 ◆レポート：『岡崎建設 Owls』によるバレーボール教室に参加。同クラブは、紫波町にある社会人の強豪クラブで主な戦績は、全日本クラブカップ優勝3回、岩手国体ベスト4、愛媛国体7位、天皇杯ファイナルラウンド進出（2016、2020）など素晴らしいものである。クラブとして目指しているのは、強いだけでなく、地元町民、県民に愛され地域に貢献できるチームとのこと。今回の事業も障がいのあるなしに関わらずバレーボールを楽しめる環境づくりを目指して企画・実施された。

さて、今回の参加者は本県知的障がい者バレーボールチーム選手とスタッフの他、地元の中・小学生等も含め、約50名。開会行事の後、早速、4つのグループに分かれてボールゲームを中心にアイスブレイク。この後は参加者の緊張も解け、和やかな雰囲気の中でバレーボールを楽しんだ。続いて、Owls選手と合同チームによる試合形式の練習である。不思議なもので周りにお手本となる選手がいると参加者も普段は見られないような素晴らしいプレーをしていた。最後にOwlsの紅白試合を見学させていただいた。ものすごい迫力にみな圧倒されていた。このような貴重な機会をいただき岡崎建設Owlsの皆様にあらためて感謝したい。また、継続的に開催されることを期待したい。



▲①まずはアイスブレイクとしてボールを使ったゲームを実施。選手たちもだいぶリラックスしたようです。②終了後の集合写真、③バレーボールの専用アリーナである「オガールアリーナ」。選手たちはここでプレーを楽しみにしておりました。④4つのグループに分かれて、それぞれでゲームを行った。⑤各グループにOwlsの選手も加わり、試合形式で実施。⑥Owlsの紅白戦。ものすごい迫力でした！

『卓球バレー教室（審判練習会）』を開催！

◆期日：令和3年2月11日（木祝）／◆パラアリーナ（盛岡市）
 ◆レポート：今回はアスレクト、ISVC、盛岡TVC、アダージョの4チームが参加。アダージョは久しぶりの卓球バレー参加であった。最初にルールの確認をして、残りの時間のほとんどは試合形式でおこなった。技術差のあるチーム同士が対戦するケースも多くなるが、卓球バレーでは技術のあるチームが試合中に技術指導や戦略をアドバイスするケースがよくある。また、選手においては、日本卓球バレー連盟の公認指導者資格を積極的に取得する動きもある。そこには自らがルールを学ぼうとする意識だけでなく、普及に貢献しようとする共助の精神のようなものが感じられる。あとは審判の技術向上が課題である。この課題はチーム練習に審判と一緒に参加するしくみを作ることが最も効果的と思われる。このような取組みを各地域で展開していきたい。



▲アダージョで紅白戦！審判はアダージョの佐々木さん

『第1回岩手県パラアーチェリー記録会』を開催！



▲①盛岡市アーチェリー協会より多数の会員の皆様にご参加いただきました。②会場の準備から撤去もご協力いただき感謝です！
 ③アーチェリーと車いすカーリングとの二刀流！武田さち恵選手

◆期日：令和3年2月11日（木祝）／◆会場：岩手県勤労身体障がい者体育館・パラアリーナ（盛岡市）
 ◆レポート：中止となった県障がい者スポーツ大会の代替大会として企画しました。開催にあたり、岩手県アーチェリー協会様、盛岡市アーチェリー協会様には大変お世話になりました。コロナ禍ということもあり、パラの選手は5名程度の参加でしたが、盛岡市アーチェリー協会との交流事業として会員15名に参加いただきました。協会員の皆様には選手として参加するだけでなく、会場の準備・撤収までご協力をいただきました。

アーチェリー競技はパラリンピックが始まった当初から長年取り組まれてきた種目です。普段の大会では、障がいのある方、ない方が共に大会を企画・運営しているユニバーサルスポーツの先駆的種目と言えます。この陰には協会員の皆様の長年に渡る取組みがあることを今回の事業を通して肌で感じることができました。私たちにも貴重な機会でした。是非、来年以降も継続して開催できるよう取り組んでまいりたいと思います。

パラノルディック日本代表チームによる

パラスノースポーツ体験教室

◆期日：令和3年2月14日（日）

◆会場：田山クロスカントリーコース（八幡平市）

◆レポート：ここ数日の冷え込みも緩み、快晴の下での実施となった。これまでクロスカントリーに取組む機会はなかったが今回、日本障害者スキー連盟の声がけにより実現した。参加者は、普段、陸上、水泳等に取組む肢体不自由、視覚障がい、知的障がいのアスリートが中心であった。また、県では、令和2年度より障がい者スポーツ基盤整備としてシットスキーを購入しており、今回がお披露目の機会にもなった。クロスカントリー競技の特徴として下肢だけではなく、上肢の筋力強化に良いことがわかる。また、膝への負担も少なく、スキー板にはエッジがないためバランスが必要になり体幹トレーニングにもなる。まさに自然の中がスポーツジムに変わる種目といった印象であった。冬場のトレーニング種目として、今後も継続して実施したい。なお、平昌パラリンピックに出場した高村和人さんにも参加していただいた。



▲①最終プログラムのリレー決戦。親子対決が実現！左から高村青波くん、高村和人さん、ガイドの藤田さん②アンカー勝負！柴田選手が小野寺選手をかわし、大逆転でゴール。先輩として貫録？③最後はみんなで記念撮影。一瞬だけマスクはずして&息止めて！

『第1回岩手県障がい者ふれあい卓球教室』を開催

◆期日：令和3年2月28日（日）

◆会場：ふれあいランド岩手（盛岡市）

◆レポート：この事業は、岩手県卓球協会が県の委託を受けて実施する選手育成を目的とした卓球教室です。今回の目玉は講師の時吉 佑一さん（ときよし ゆういち）です。ニツタク契約選手で2015年、2017年には全日本卓球選手権大会混合ダブルスで3位入賞等、素晴らしい戦歴をお持ちです。また、2019年からはパラ卓球日本代表立位クラスの監督を務めています。また、パートナーとして盛岡市で卓球教室を経営する高橋謙太さんにも参加していただきました。

参加者は約40名。パラ系の選手に加えて、盛岡第四高校の卓球部など健常者アスリートも参加しておりました。最初にデモンストレーションとして時吉さんと高橋さんの打ち合いを見せていただきました。お二人の技術の高さは圧巻でした。続いて、教室に入ります。

参加者を6グループに分け、1グループずつ、時吉さんと高橋さんの2名で指導を行いました。卓球教室を経営するお二人だけに指導は適確で短時間ながらも参加者の技術向上が見られるシーンもあり驚きました。なお、各グループに1台卓球台を割り当てているので、順番を待つ間は練習時間となりました。こちら、県卓球協会所属の指導員の皆様からの巡回指導によりサポートいただきました。

参加者を一通り指導していただいた後、各グループで希望する方与时吉さんとの交流試合（8対8のカウントから）を行い、大いに盛り上がりました。その後、ジャンケンゲームを行い勝者にはニツタク製品が贈られました。時吉さんはサインや記念撮影にも気軽に応じていただくなど本当に温かなお人柄でした。また、機会があれば是非お招きしたいと思います。最後になりましたが、県卓球協会とご協賛いただいた日本卓球株式会社様にあらためて感謝を申し上げます。



▲時吉 佑一さん（※画像は、千葉県市川市：2019.2月オープン）



▲①時吉さんと高橋さんによるデモンストレーション。話題の「チキータ」の打ち方を丁寧に説明いただきました。②時吉さんからフォアハンドの時のステップについてアドバイスを受ける鈴木選手（三重とこわか大会代表）、③お楽しみのジャンケンゲーム。ゲームの進行は、ニツタクの細井秀剛さん、会場にはラケットなどニツタク製品が展示され、試し打ちコーナーも設けられました。

『障がい者スキー交流会2021』を開催！

◆期日：令和3年3月6日（土）～7日（日）
 ◆会場：安比高原スキー場（八幡平市）
 ◆レポート：コロナ禍により2年ぶりの開催となりました。今回も日本プロスキー教師協会（以下、SIA）障がい者スキー委員会の皆様にご協力いただきました。14名のSIA公認の障がい者スキーインストラクターのうち、本県所属は2名のみで、新潟、長野など全国から駆けつけていただきました。コロナ禍における県外派遣を懸念する声もある中、本当にありがたいことです。所属スキー学校のご理解とご支援に対して、あらためて感謝を申し上げます。さて、参加者は、コロナ禍により少なめでスタッフ含めて75名でした。安比にしては珍しく2日間とも良い天気にも恵まれ、皆さん久しぶりのスキーをたっぷり楽しむことができました。

なお、今回のスキー交流会では「初」の出来事がいくつかありましたので紹介します。1つ目は岩谷高峰さんの参加です。岩谷さんと言えば、元オリンピックであり、ソチオリンピックアルペンチーム監督など、数々の指導者としての実績を持つ名スキーヤーです。今後は岩谷さんの人脈や影響力を活かした理解促進や立位スキーヤー及び競技力向上を目的とするプログラム展開の可能性が広がりました。また、交流会初日の教室終了後にスタッフや宿泊者を対象として、岩谷さんのミニ講演会を開催しました。



▲①岩谷 高峰（いわや なおみね）さん HEROES SNOW SCHOOL 代表。1984年、サラエボオリンピック出場。ソチオリンピックではアルペンチーム監督を務める。



▲①、②立位スキーのグループ、③バイスキーのグループ、④スノーカートの指導の様子。安全用にテザーをつないでいるが自立滑走している様子が確認できる。

2つ目は新機材の導入です。NPO 法人いーはとーぶスポーツクラブでは令和2年度に企業の助成金（ノエビア財団）により、スノーカート（チェアスキーの一種）を購入しました。この機材を今回のスキー交流会で初導入させていただきました。本交流会ではこれまでチェアスキーとバイスキーを使用。その使い分けを簡単にいうと、障がいの程度により自立滑走できる方はモノスキー、それ以外の方はすべてバイスキーといった感じです。ここで、いつも悩むのがモノスキーとバイスキーの中間にいると思われる方々です。これを解消するミラクルな機材がスノーカートです。最大の特徴は比較的重い障がいがあっても自分でスキーをコントロールできることです。2本板はバイスキーと同様ですが、これをハの字（いわゆるボーゲン）に操作することにより、ターンやブレーキが可能となります。今後、上肢のコントロールの苦手なお子さんでもスキーを自分でコントロールして楽しめる可能性が広がります。

3つ目は、ガイドスキーヤーの参加です。長野パラのガイドスキーヤーである佐々木隆興（たかおき）さんにご参加いただきました。これにより、視覚障がいのある方の競技スキーへの取組みを再開できそうです。

今回の交流会を通してあらためて感じるのは多種多様な障がいへの対応とそれぞれのニーズ（体験から競技まで）にどのように対応していくかです。当協会だけでできることではありません。今後もSIAやスキー場、競技団体や関係団体と情報共有しながら『健全障害を問わずいつでもスノースポーツを』楽しめる環境整備に取り組んでいきたいと思っております。



「ゲートボール紫波交流大会」を開催しました！

◆期日：令和3年3月22日（月）
 ◆会場：サンビレッジ紫波（紫波町）
 ◆レポート：今回は6チームが参加して、リンク戦により順位を競い合った。健全者のみの参加が6チーム中2チームであった。コロナ禍でなければ盛大に開催したいところであるが、今回は午前だけの日程で開催した。短時間での開催は運営的には難しい部分もあるが紫波町ゲートボール協会のご協力によりスムーズに進行することができた。

さて、試合は宮古愛好会が好調に白星を重ねていった。久しぶりに参加した奥州市も順調に白星を重ねる。この2チームの直接対決を制した宮古愛好会が優勝した。惜しくも6チーム中5位となった紫陽花クラブは優勝した宮古愛好会で大接戦を演じるなど、各チームの実力差はなく、好ゲームが多かった。成績一覧は次ページをご覧ください。



▲優勝した宮古愛好会チーム・高橋 智 主将

ゲートボール紫波交流大会 2021 結果

順位	チーム名	1試合				2試合				3試合				4試合				勝数	負数	得点	失点	失点
		得点	失点	勝	負	得点	失点	勝	負	得点	失点	勝	負	得点	失点	勝	負					
1	C 宮古愛好会	15	7	1		20	10	1		25	10	1		11	10	1		4	0	71	37	34
2	A 奥州市	11	9	1		10	20		1	14	10	1		17	10	1		3	1	52	49	3
3	D 東和	20	6	1		12	12	1		10	14		1	8	8	0.5	0.5	2.5	1.5	50	40	10
4	E 中陣	7	15		1	19	8	1		10	17		1	8	8	0.5	0.5	1.5	2.5	44	48	-4
5	B 紫陽花クラブ	9	11		1	12	12		1	14	7	1		10	11		1	1	3	45	41	4
6	F 矢巾・紫波・東和 合同	6	20		1	8	19		1	10	25		1	7	14		1	0	4	31	78	-47

『令和3年度中級障がい者スポーツ指導員養成講習会』を開催しました



▲①受講生の皆さん、長期間に渡り、お疲れさまでした！②実技：水泳の指導方法、③「障がい者スポーツ指導における留意点」～車いすスキルアップの重要性を学ぶ、④新カリキュラム「指導者のキャリア形成」～フラワーアレンジメントを体験

◆期日：以下、8日間の日程で実施

令和3年1月23日(土)～24日(日)、1月30日(土)～31日(日)

令和3年3月13日(土)～14日(日)、3月20日(土)～21日(日)

◆会場：ふれあいランド岩手

◆レポート：毎年、本県では岩手県の委託事業として日本障がい者スポーツ協会（以下、日障協）公認障がい者スポーツ指導員養成講習会の初級と中級の講習会を開催している。今年度から初級は県央地区、沿岸地区の2回実施することになった。また、日障協の委託事業として理学療法士を対象とした中級講習会（4日間開催）を実施しているため、合計4回の公認講習会を開催した。

さて、この中級講習会は初級指導者資格取得者を対象としたもので、8日間の長丁場となる。そのため、受講するためには職場やご家庭等との相談が必要となり、高いモチベーションに加えて周囲の理解も参加条件の1つであろう。なお、昨年度の講習会は、コロナの影響により前期日程のみで中止となったため、昨年度の実受講者も数名参加していただいた。

また、今年度よりカリキュラムが改正されている。変更点としては従来の科目統合や新たに追加された「障がい者スポーツ指導員としてのキャリア形成」等、地域において実際にリーダーとして活躍するために必要な内容に重点をおいているという印象を受けた。さらに本講習会では受講者の職域等を考慮して、講師と内容を調整するようにしている。受講者にとって満足度の高い内容にすることも重要な視点と考えている。

実際に中級修了者の多くは、資格取得後にそれぞれの地域において全国障害者スポーツ大会の役員参加や各県事業に積極的に参加協力している方が多い。今後も本講習会を継続して開催し、東北全体の活動が盛り上がるよう少しでも貢献できたらと思う。



新規会員紹介

新たにご入会いただきました会員を紹介いたします。
岩手県スポーツウエルネス吹矢協会 様（正会員）

三八五観光株式会社 様（賛助会員）

株式会社米澤商事 様（賛助会員）

有限会社新栄観光バス 様（賛助会員）

今後とも当協会のパートナーとしてご支援をお願いいたします！



会員紹介 -Our Partners-



いつもあたたかいご支援をいただきありがとうございます！

(令和3年9月30日現在 敬称略・五十音順)

賛助会員一覧 (団体)

アーク (株)	(株) アイエムアイ	(株) アイシーエス	(株) IBC 岩手放送
(株) 青紀土木	(一社)岩手県建設業協会	岩手県産 (株)	岩手スポーツ用品販売 (株)
岩手県都市ガス協会	(一社)岩手県理学療法士会	いわて生活協同組合	岩手電工 (株)
岩手電力 (株)	岩手トヨペット (株)	(株) 岩手日報社	(株) エツリコ・エンジニアリング
岩手雪運 (株)	岩手リオン補聴器センター	(株) ヴィクトリア ネクススカンパニー	江刺岩手ライオンズクラブ
(株) 遠忠	(株) カガヤ	(株) 川徳	(株) 菊地建設
(株) 北日本銀行	(株) 久慈設計	小岩金網 (株)	(株) 小林精機
(株) 志百家	(株) 寿広	白金運輸 (株)	(有) 新栄観光バス
(有) タイガースポーツ	(株) テレビ岩手	(株) 中野製麺	(株) 日盛ハウジング
日本身体障害者団体連合会東北事業所	(株) 長谷川建設	府金製粉 (株)	(株) 藤沢体育堂
(株) ヘルジョイス	みちのくコカ・コーラボトリング (株)	宮城建設 (株)	(株) 三八五観光
名鉄観光サービス (株) 盛岡支店	(株) 明和土木	盛岡商工会議所	(株) やよいデライト
(株) ユニバース	(株) 米澤商事	菱和建設 (株)	

賛助会員一覧 (個人)

白畑 由貴子 菅 里美 平藤 淳 藤村 誠 堀川 裕二

バナー広告掲載中！

賛助会員のバナー広告は無料で掲載しております。現在、以下34団体のバナー広告を掲載中。この他、掲載依頼がありましたら随時、当協会HPにアップいたします。詳細につきましてはお問合せ下さい。

正会員一覧 (団体)

岩手県 ID バasketボール連盟	(一社)岩手県作業療法士会	(社福)岩手県視覚障害者福祉協会
(社福)岩手県社会福祉協議会	(社福)岩手県社会福祉事業団	(社福)岩手県身体障害者福祉協会
岩手県スポーツウエルネス吹矢協会	(NPO)岩手県精神保健福祉連合会	岩手県知的障がい者サッカー連盟
岩手県知的障害者ソフトボール協会いわてスマイリーズ	岩手県特別支援学校連絡協議会	岩手チアスキークラブ・イーハトーブ
(一社) コ・イノベーション研究所	サークル「ゆうの会」	(社福)自立更生会
全国脊髄損傷者連合会岩手県支部	(社福)手をつなぐ	(株) トラスト保険
ドルフィンズ岩手	(株) 畠山冷機工業所	ラッセル岩手

正会員一覧 (個人)

阿部 史憲	伊藤 昇	井上 勝巳	井上 君之	今宮 正彦	岩淵 典仁	上村 弥
及川 貞之	小江 巧	小原 敏弘	軽石 義則	菊池 幸子	小坂 亜純	佐々木 君夫
佐々木 茂	笹木 正	佐々木 満	佐藤 勝士	佐藤 慎二	佐藤 隆秀	佐藤 佑哉
篠原 政良	白藤 友一	菅原 幸二	高橋 修	中野 正紀	野辺地 省吉	藤井 公博
三浦 拓朗	民部田 誠	横沢 高德				

◆会員の募集について◆

「Sports For All」の考えに基づき、障がいのある方々が一人でも多く、いつでも気軽にスポーツに参加できるように取り組んでまいります。皆様のご支援、ご協力をお願いいたします！

区分	金額
賛助会員	個人 1口 1,000円
	団体 1口 10,000円
正会員	個人 1口 1,000円
	団体 1口 5,000円

*** 問合せ先 ***
〒020-0831 盛岡市三本柳 8-1-3
(一社) 岩手県障がい者スポーツ協会
TEL 019-637-5055
FAX 019-637-7626
E-mail : info@iwate-adaptive.or.jp
<https://www.iwate-adaptive.or.jp/>